

Japanisch
Deutsches
Kulturinstitut

財団法人日独文化研究所

所内報

Informationen Innerhalb des Japanisch Deutsches Kulturinstitut

2012
創刊号

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町 19-3

所内報刊行のいきさつ

日独文化研究所は創立 50 周年を機会に、新たな研究課題を掲げ、その諸成果を発信する場として、年報「文明と哲学」を刊行するようになりました。それに伴って従来の所報が中断されておりましたが、今回、新たに「所内報」としてこれを復活させ、わかりやすいニュースレターとして発行することにしました。



本研究所の理事長・所長 岡本道雄先生は平成24年7月24日22時55分、慢性心不全のため98歳の天寿を全うされて逝去されました。あらためてご冥福をお祈りするとともにご報告申し上げます。

岡本先生が本研究所に託された思いを、遺文から抜粋し掲載致します。

岡本道雄先生最後のメッセージ

日独文化研究所の前史は 1930 年代に設立した独逸文化研究所に遡ります。第二次世界大戦の敗戦と共に政府より廃止が命じられ、京都大学に寄附されて閉鎖となりました。しかし 1956 年 3 月、京都大学医学部教授を中心とする学者たちの努力で、日本唯一のドイツ文化研究所として、改めて日独文化研究所として蘇生しました。

一方、研究所と同じ建物に同居するドイツ文化センターの設立は、1974 年、当時京都大学総長であった私がドイツの学長 6 名を招待したところから始まります。翌 1975 年、世界医科大学長会議がモスクワで開催された際、10 名のドイツ連邦共和国大学長が私を招待し、当時ドイツ政府が計画中の「国境にかける橋」計画に基づき、日本にもう一カ所、ゲーテ・インスティトゥートの拠点を設けることを提言しました。そこで私は京都府知事、京都市長などと交渉し、京都市の土地を 60 年間無償貸与する契約を結び、ドイツ文化センターの建築が可能になりました。

爾来、すでにほぼ 50 年が経過しました。文化交流の内容は時代と共に変化しましたが、日独文化研究所は日独文化交流に引き続き寄与したいと考えています。それも、哲学プロジェクト「近代科学技術文明と

人類の未来」によってです。

私はこの 10 年近く、左脊髄動脈の血栓のため歩行困難となり、入退院をくり返しているのが、哲学の勉強を始めました。そして、Victor von Weizsäcker 著、Pathosophie、「パトゾフィー」に出会いました。これは、京都大学名誉教授木村敏先生が 12 年をかけて日本語に訳して 2010 年 1 月に出版したものです。ちなみに甥の Carl Friedrich von Weizsäcker は、かつて私が京阪奈文化学術都市における中核的精神的中心として創りました国際高等研究所 (IIAS) の開所式に、私がミュンヘンの片田舎スタインベルグから招待し、またその弟、Richard von Weizsäcker は、日独文化研究所と京都大学共催し、比叡山延暦寺根本中堂でおこなったシンポジウムに招待しました。Weizsäcker の著書と平行して、私は最近、ルネ・デカルトの諸著をも通読しています。私の理解では、デカルトも Victor von Weizsäcker も共に、まさに私がこの日独文化研究所でおこなうことを決めた「近代文明と人類の未来」の研究に一致することを、先駆者として考えています。

日独文化研究所がないうことは、ささやかですが、掲げた課題の意義は小さくはありません。上記の研究課題は現代世界に喫緊のものだからです。小さな研究所ながらこれを追求し、世界に寄与することを願っています。

岡本道雄先生お別れの会 開催

9月17日(14時から16時)、「岡本道雄先生お別れの会」が京都大学百周年記念館百周年記念ホールにて、京都大学総長松本紘先生、本研究所理事木村敏先生を發起人として執り行われました。超大型台風の影響のため、大荒れの模様という天気予報でしたが、「晴れ男」の岡本先生にふさわしく、大変よいお天気となりました。祭壇はコスモスなど明るい花々で彩られ、笑顔の岡本先生のご遺影が掲げられました。

京都大学理事、副学長の塩田浩平先生のご挨拶で開会、一同黙祷のあと、松本総長に引き続き、木村敏先生が追悼のお言葉を述べられました。続いて、お別れの言葉を、京都大学元総長 井村裕夫先生、京都大学名誉教授 水野昇先生が述べられました。弔電奉読に続き、ご遺族を代表して、次女岡本貴子様よりご挨拶があり、代表献花に引き続き、参列のみなさまの献花を受けました。元総長室に設けられた迎賓室では、岡本先生ゆかりの著作や写真などを展示し、ご愛用の品々や最後まで続けておられた哲学の勉強の様子などを身近に感じていただけたと思われまふ。大学関係者はもとより、財界、政界など多方面からおよそ400人もの方々にご臨席を賜りました。本研究所としてもあらためてお礼を申し上げます。



お別れの会の様子



元総長室にて先生ゆかりの品を展示

追悼の言葉

木村 敏

財団法人日独文化研究所理事長・所長であられた故岡本道雄先生とのお別れの会に、研究所を代表して追悼の言葉を申し上げます。

岡本先生は、京都大学医学部教授、医学部長、学生部長、総長等の要職を歴任されたのち、1982年、昭和57年に財団法人日独文化研究所所長にご就任になり、1989年、平成元年からは理事長も兼ねておられました。その間、臨時教育審議会会長、国際高等研究所所長、同理事長、稲盛財団会長などの要職にもおつきになりながら、日独文化研究所のお仕事は、去る7月24日にご逝去になるまで、ひとときも先生の念頭を離れることがありませんでした。日独文化研究所の歴史をひもときますと、京都には戦前から独逸文化研究所が設立されておりましたが、これが1945年、昭和20年に日独両国の敗戦によっていったん解体されました。しかしこれを惜しむ声が高く、当時ドイツの医学と関係が深かった医学部を中心として、1956年、昭和31年に財団法人日独文化研究所として復活したのであります。そして、当時からやはりドイツとの関係の深いヤンマーディーゼル株式会社

(現ヤンマー株式会社) その他財界からの資金的な援助を受け、初代研究所長には京大医学部の松本信一教授、初代理事長にはヤンマーディーゼル株式会社の山岡孫吉社長が就任されました。1982年、昭和57年に第二代研究所長の後藤光治教授が逝去され、岡本先生が第三代の所長にご就任になりました。そして、かねて総長時代より計画を練っておられましたドイツ側の京都ドイツ文化センター(通称「ゲーテ研究所」と)の建物の共同使用、ひいては現在の鴨川沿いの土地への移転を実現されました。1989年、平成元年にはご自身が理事長に就任され、理事長兼所長として研究所の活動を一手にお引き受けになりました。研究所運営に当たっての岡本先生の理念は、哲学を中心として日独の文化交流を推進するというもので、その基本テーマは「科学技術文明と人類の未来」でありました。そしてこの理念にそった事業として、本研究所は1991年、平成3年に年一回の公開シンポジウムを開始し、また2003年、平成15年には年三回、各回六時間よりなる哲学講座を開講して現在に至っております。また2008年、平成20年以降、先生の理念を具現した年報『文明と哲学』の刊行も続けております。その他、特記すべき事柄としては、1993年、平成5年に、当時国際高等研究所の所長を兼ねておられた岡本先生が、わざわざドイツまで出向かれて、著名な理論物理学者であ

るとともに哲学者としても知られていたカール・フリードリヒ・フォン・ヴァイツゼカー氏を高等研究所と日独文化研究所に招聘されましたこと、その翌々年には同氏の実弟で東西ドイツ統一時にドイツの大統領でありましたリヒアルト・フォン・ヴァイツゼカー氏を招いて、比叡山延暦寺根本中堂で講演と対談の催しを行われたことを挙げなくてはなりません。またこの両氏の伯父で数々の名著を遺している神経医学者・哲学者のヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカーが唱える「医学的人間学」に対しても、先生は並々ならぬ関心を示しておられました。医学部のご出身で解剖学者である岡本先生が、このように激しい情念を哲学に向けられたのには、一つの明白な動機がありました。それは先生が京大の学生部長をしておられた時期に始まって、その後総長としての先生を悩ませた、いわゆる学園紛争であります。連日反体制派の学生たちと一見不毛な議論を重ねながら、先生はこの運動の本質をなんとか見抜こうと真剣にお考えになりました。それで、当時の世界的な体制批判思想の一つの中心であった所謂フランクフルト学派の哲学に目を向けられました。そしてそこから次第に哲学全般へと関心を広げられたのであります。

2002年、平成14年の9月、先生は脊髄血管の血栓によるいわゆるブラウン・セカール症候群に罹患されて、左脚の運動麻痺を来され、翌年その機能回復訓練中に転倒して右脚を骨折され、歩行不能に陥られました。それ以来、車椅子の不自由な生活が始まりましたが、毎週二回、リハビリテーションのために京大病院へ通院された後には、かならず研究所にご出勤になり、理事長・所長としての用務をこなされるほか、さまざまな書物をお読みになったり、ご自身の思索を文章におまとめになったりするなど、きわめて生産的な生活を続けておられました。

2007年、平成19年頃、日独文化研究所が同居しておりますドイツ側の施設である京都ドイツ文化センターが、語学研修を中心とする従来のゲーテ研究所を廃止し、常時数名のドイツ人芸術家を同センターに居住させる施設に改組するという計画を提示してまいりました。元来、日独文化研究所とゲーテ研究所との同居は、岡本先生が京大の総長をしておられた時に京都府と京都市に強く働きかけられて実現したものでありますので、先生は当然この組織変更にも強く反対されましたが、ドイツ側はこれを国家事業として推進し、昨年秋に竣工開所するに至りました。その頃から先生のご体調も思わしくなく、昨年12月31日に肺炎の症状のため急遽京大病院へご入院になりましたが、長期療養の必要があるとの判断で今年の3月に伏見区の稲荷山病院に転院されて、その後は遂にご自宅へのご退院はかないませんでした。私も何回か稲荷山病院へお見舞いに伺いましたが、精神的な活発さ



追悼の言葉を述べる木村敏常務理事

は最後まで失われることなく、研究所の活動についても明確な意思表示をなさっておられました。ゲーテ研究所の改組に伴うドイツ文化センターとの契約更改に関しても、本年6月に署名をすまされ、今後の日独文化交流に向けての新たな第一歩をお開きになりました。そして私どもに後事を託されて、7月24日の深夜、98歳の天寿を全うされたのであります。

最後にひとつ、岡本先生のお人柄をうかがわせるお話を申し上げたいと存じます。2003年、平成15年の暮れに、先生の奥様が体調を崩されて市内の小さな民間病院にご入院になりました。これは奥様が、先生からの紹介だと話があげさになるのをお嫌いになって、ご自分のご意向だけでその病院に入院されたものとうかがっております。ちょうどそのとき、先生はブラウン・セカール症候群のために京大病院へ入院中のことでした。ところが先生は即座にご自分も京大病院からその民間病院へ転院され、同じ病院で必死に奥様を元気づけようとなさいました。私も何回かその病院へうかがって、先生や奥様をお見舞いいたしましたが、自分はこれまで家内に向かって言いたい放題のことばかり言ってきて、何も家内の苦勞に報いることをしてやれなかったという先生のご心痛は、まことに胸に迫るものがありました。結局、奥様は肺癌の骨転移ということでそれからまもなくご逝去になりましたが、そのときの先生のお悲しみは筆舌に尽くしがたいものであります。先生は普段からご家族や部下に対して、ときには行き過ぎとも見えるほどの強い態度をお示しになって、周囲から畏怖されておりましたが、実はその奥に非常に暖かいお心を秘めていらっしゃるということを、常々親しくお付き合いをさせていただいておりました私には痛いほど感じられました。医学は技術だけでは駄目だ、医者と患者の人間関係がすべてだと常日頃おっしゃっておられた先生のお言葉は、けっして美辞麗句ではありませんでした。

岡本先生、長いあいだ本当にお疲れさまでした。先生のご遺志は残されたわれわれが力の及ぶ限り実現いたしますから、どうかゆっくりとお休み下さい。

平成24年9月17日

財団法人日独文化研究所 常務理事 木村 敏

Goethe-Institut Villa Kamogawa

ゲーテ インスティトゥート ヴィラ鴨川

ご紹介

ゲーテ・インスティトゥートは、ドイツ連邦共和国の公的な文化機関で、世界93カ国約150カ所で、ドイツ語の普及を促進し、各国とドイツの文化交流を実践し、また、ドイツの全体像を紹介しています。

2013年に開設50周年を迎える京都のゲーテ・インスティトゥートは、2010年夏まで、文化芸術関連の催しやドイツ語コースが開催され、ドイツ文化センターとの通称で親しまれてきました。2011年より当館は、アジアで唯一のドイツ連邦共和国のアーティスト・イン・レジデンス（滞在型芸術創造空間）「ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川」として活動を始め、異文化間の対話の促進と、国際的な文化ネットワークづくりに貢献しています。

ご挨拶

館長

マルクス・ヘルニヒ



館長ポートレート © Marcus Hennig

ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川は、その起源を決して忘れることはありません。日本の古都におけるドイツ連邦共和国の文化活動は、1963年、当時の財団法人日独文化研究所の館内において始まりました。そして2012年5月15日、我々は共に未来へ繋がる約束を交わしました。館内使用の新しい契約締結を「乾杯」で祝したのです。

過去・現在・未来は、互いに繋がっています。過去を振り返るものだけが、現在を理解し、未来への展望を描くことができます。必要であるのは「長期的に物事を捉える目線」であり、京都ドイツ文化センターが今日のアーティスト・イン・レジデンス「ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川」へと発展してきた過程において、日独文化研究所は重要な意味を持っています。ヴィラ鴨川は、様々なプロジェクトを抱いた一流のアーティストを招聘する、東アジアで唯一のドイツ連邦共和国の施設です。東の文化を西へもたらし、西の文化を東へ伝えるアーティストにとって、東アジアの文化の中心である京都は、まさにうってつけの場所なのです。

東アジア、とりわけ中国でほぼ人生の半分を過ごしてきた私自身は、東アジアの平和意識の発展には、京都が文化的に重要な役割を果たすと信じています。ドイツは、戦後、ヨーロッパ文化に共通する遺産を築き上げる努力をしてきました。これらの発展の可能性から、日独文化研究所がテーマとされている哲学や、ヴィラ鴨川が力を注ぐ芸術の持つ表現の豊かさといった、数多くの経験を分かち合うことができます。

財団法人日独文化研究所が、京都でドイツ文化の拠り所を形成されましたことに、我々は感謝の意を表明し、未来を共に築いてゆけることを嬉しく思います。今後益々の発展を遂げられますことをお祈り申し上げます。

ゲーテ・インスティトゥートはヴィラ鴨川に、ドイツの芸術家を3ヶ月間招聘し、日本に滞在しながら創作活動を行う機会を提供します。年間約12名の招聘芸術家は、日本の文化シーンと直接交流を図る中、プロジェクトを展開し、新たな発想を得て、持続可能な関係を築いてゆくことができます。

2011年春に、最初の招聘アーティストで作家のルーシー・フリックが滞在しました。その後も、様々なジャンルの芸術家がヴィラ鴨川に滞在し、創作した作品が実を結んでいます。美術家のニナ・フィッシャーとマロアン・エル・サニが、ヴィラ鴨川滞在中に手掛けた作品“Spirits closing their eyes”は、2012年9月にソウル国際メディアアートビエンナーレで初上映されました。振付家トーマス・レーメンの作品“Bitte…”も、2012年9月にヘルシンキで初演されています。

ヴィラ鴨川1階の図書室とカフェ・ミュラーは、一般の来館者に開放されています。図書室には、20、21世紀の芸術・文化を主要テーマとした蔵書ならびに、ドイツの新聞や雑誌を各種取り揃えています。

カフェ・ミュラーでドイツの味覚を楽しみつつ、ゆったりとした読書のひとときをお過ごしいただけます。



ヴィラ鴨川館内 © Jan Siefke



カフェと庭 © Goethe-Institut Villa Kamogawa



レジデンス室内 © Goethe-Institut Villa Kamogawa



アーティストのスナップ © Jan Siefke

Der Brief
von
Deutschlandドイツだより (1)
Der Brief von Deutschland

ドイツ語のゆくえ

本研究所理事・ケルン大学教授代行 大橋 良介

「世界哲学会」(World Congress of Philosophy) という学会がある。5年ごとに開催され、来年の第23回大会は、ギリシアのアテネが開催地である。哲学のご先祖たちの地だから、一度は行ってみななければと思っていたが、大会への講演招待が舞い込みそうなので、どうやらギリシア詣での念願は、来年には叶いそうだ。

しかしながら、実は少し重たい気持ちになっている。ふたつの問題のゆえだ。ひとつは、ユーロ危機を招いて出口の見えない、ギリシアの経済危機だ。休暇旅行に行ってきた人たちは異口同音に、現地は危機などこ吹く風で活気があると言う。旅行者にとっての現実、は、そうなのだろう。しかし、だからといってユーロ危機が蜃気楼というわけでもあるまい。デルフォイの神殿は神々が去ったあとの廃墟だが、観光遊覧の場所として賑わう。しかしその観光に頼るほかない現地の人々のことを、つい考えてしまう。

気持ちを重たくさせる、もうひとつの問題は、「ドイツ語の危機」である。この世界哲学会の委員会で、公用言語からドイツ語を外すことが、まじめに提議されたのだ。カント、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデッガー、といった思想家たちの名前を列挙すれば、哲学におけるドイツ語の位置は不可侵のようにも思われるが、事実なのである。すべて英語、という時代の現象でもある。他の公用語(フランス語、スペイン語、中国語)は、使用人口の大きさから、廃止論は出ていない。他方で、ドイツ語セッションに来る人数は少ない上に、ドイツの哲学教授たちまでがこぞって英語で喋りたがる傾向があるから、それならドイツ語は廃止すれば、という提議になったようだ。いまドイツ哲学会会長が、講演依頼を受けた会員たちに、「皆さん、ドイツ語で発表してください」と、発破をかけている。

アルフォンス・ドーデの『最後の授業』に、ドイツ軍の支配下におかれたアルザス地方の学校で、フランス語の最後の授業がなされる日のことが、描かれる。攻守とを替えたような状況が、「世界哲学会」に到来する可能性がある。「最後の授業」をするアメル先生は、黒板に“Vive la France!”(フランス万歳)と書いた。ドイツ哲学のテキストがドイツ語で書かれている限りは、最後は「ドイツ万歳」で終わると思うが、外人部隊として招かれる私も、多少の責任を感じざるを得ない。

賛助会員の紹介(1)

キンシ正宗株式会社
京都町家麦酒醸造所

キンシ正宗堀野記念館、京都町家麦酒醸造所は御所の南、堺町通二条上ルに位置し現在では、周りは多くのマンションに囲まれています。そんな中であって私どもの醸造所は1997年より地麦酒の醸造を開始しました。それに先立ち、造り酒屋の歴史と町家文化を伝えるキンシ正宗堀野記念館は建都1200年を記念した京都市からの依頼を受け公開を開始しました。社名となっております、キンシ正宗のキンシは金鶏勲章・正宗には音読みでセイシュウ(清酒の意味)がありその創業地、堀野記念館には天明の昔から酒造りに用いられた名水「桃の井」が今なお、こんこんと毎時3tも湧き続けております。「桃の井」の水を用いて今一度酒造りをしたいという思いは、1995年のビール醸造における法の規制緩和をうけこの地での地麦酒醸造を決意させました。

1997年創業時よりドイツの「ビール純粹令」を守り、麦芽・ホップ・水のみ原料による麦酒醸造を行っております。ドイツケルンの「ケルシュ」・デュッセルドルフの「アルト」の二種を軸に現在ではイギリスの「ドライスタウト」・「ノンアルコールビール」に季節限定ビールを加えたラインナップとなっております。

ビール造りの先人ドイツで飲まれるその土地土地の地ビールのように「京都に来たらまあこの京都町家麦酒を飲んでみてください。」といわれるようなビールづくりを目指し今後も私どもはビール造りを続けたいと考えています。



電話 075-223-2072





平成23年度の報告

建物改築及び契約関係による哲学講座の休止、また、出版社変更による年報出版の遅れのため、例年より縮小した事業となりました。

◎事業報告

1. 第21回公開シンポジウムの開催

連続テーマ「生と死」第3回

日 時：平成24年2月5日(日)

場 所：京都大学大学院人間・環境学研究所棟 地下大講義室

基調講演 鷺田清一(大谷大学教授・前大阪大学総長)

「死なれるということ」

秋富克哉(本研究所理事・京都工芸繊維大学教授)

「死を死として能くすること—ハイデッガーの技術論をもとに」

約150名が参加、パネル討論を行い、活発な討論がなされました。

2. 賛助会員年次総会：講演会・音楽会の開催

日 時：平成23年11月30日(水) 場所：京都全日空ホテル

講 演 高田篤(本研究所理事・大阪大学教授)

「ドイツにおける民主制論—その文脈と意義」

ギター及び二胡による演奏会

約80名の賛助会員が出席し、交流を深めることができました。

役員の変動

- 1. 理事の退任 高橋 義人 氏 (平成23年5月28日付)
- 2. 理事の新任 秋富 克哉 氏 (平成23年5月25日付)
- 3. 理事の再任 武田 隆男 氏 (平成23年5月25日付)
- 谷 徹 氏 (平成23年5月29日付)
- 村田 純一 氏 (平成23年5月29日付)
- 山崎 和夫 氏 (平成23年5月29日付)
- 4. 監事の再任 宇野 武男 氏 (平成23年5月25日付)
- 沓 元清 氏 (平成23年5月25日付)
- 5. 評議員の再任 松本 紘 氏 (平成23年10月1日付)
- 尾池 和夫 氏 (平成23年10月1日付)
- 6. 評議員の退任 奥村 正悟 氏 (平成23年6月30日付)
- 笹尾 登 氏 (平成23年6月30日付)
- 長 恵祥 氏 (平成23年6月30日付)
- 7. 評議員の新任 遠藤 隆 氏 (平成23年7月1日付)
- 中本 修司 氏 (平成23年7月1日付)
- 山極 寿一 氏 (平成23年7月1日付)

理事会・評議員会の開催

平成23年5月25日京都大学百周年時計台記念館会議室IVにて15時より理事会、16時より評議員会を開催し、次の議案について審議可決しました。(理事会)

- 1. 平成22年度事業報告並びに同収支決算について
- 2. 平成23年度事業計画(案)並びに同収支予算(案)について(評議員会)
- 1. 平成22年度事業報告並びに同収支決算について
- 2. 平成23年度事業計画(案)並びに同収支予算(案)について
- 3. 理事の選任について(高橋義人氏退任、武田隆男氏・谷徹氏・村田純一氏・山崎和夫氏再任、秋富克哉氏新任)
- 4. 監事の選任(宇野武男氏・沓元清氏再任)について

平成23年6月30日、日独文化研究所にて臨時理事会を開催し、次の議案について審議可決いたしました。

- 1. 評議員の選任(遠藤隆氏・中本修司氏・山極寿一氏新任)について
- 平成23年10月20日、日独文化研究所にて臨時理事会を開催し、次の議案について審議可決しました。
- 1. 評議員の選任(尾池和夫氏再任)について

◎財務報告

資 産					正味財産
(百万円)	基本財産	特定資産	その他 固定資産	流動資産	
207.8	173.3	10.6	15.6	8.1	207.7

収 入			支 出		
(万円)	賛助会費	その他	(万円)	事業費	管理費
568	527	41	584	162	422

収支差額はマイナス16万円、公共事業比率は11.6%にとどまりました。

平成24年度活動計画

◎事業計画

1. 第22回公開シンポジウムの開催

「生と死」シリーズ第4回目(予定)

日 時 平成25年2月10日(日) 14時から16時

場 所 京都大学大学院人間・環境学研究所棟 地下大会議室

基調講演 中井吉英(関西医科大学名誉教授)、丸橋裕(兵庫県立大学教授)

2. 年報の刊行

「文明と哲学」第4号 装いも新たにこぶし書房より刊行致しました。(終了)

「文明と哲学」第5号 25年3月末に刊行の予定です。(予定)

3. 哲学講座の開催

しばらくお休みしていましたが、9月より再開いたしました。

初秋講座 ハイデッガーシリーズ1

「ハイデッガーとフッサール」(終了)

講 師 谷徹(本研究所理事・立命館大学教授)

日 時 9月29日、10月13日、10月20日、3日間全6回

ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川小ホールに約30人の受講生を迎えました。

初冬講座 知の諸層シリーズ1「アリストテレス・6講」(予定)

講 師 日下部吉信(立命館大学教授)

日 時 平成25年2月2日から3月9日の土曜日午後

詳細が決まり次第、ホームページなどでご案内いたします。

4. 賛助会員年次総会

11月26日(月)16時から京都全日空ホテルにて

講 演 秋富克哉(本研究所理事・京都工芸繊維大学教授)

「科学者の社会的責任」再考—唐木順三の遺言から

演 奏 筑前琵琶 田中旭泉 「壇の浦悲曲」

◎ニュース

ゲーテ・インスティトゥートとの契約更改

平成24年5月15日に新たな契約を締結し、6月7日にはゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川にて、ヘルニヒ館長のもと、オルブリッヒ総領事、ピーダーマン副総領事を迎え、セレモニーをおこないました。本研究所からは木村敏常務理事、高田篤理事が参加し、今後の事業、交流に向けて活発な意見が交わされました。

高田篤理事がシーボルト賞を受賞

日独学術・文化交流に功績のあった研究者に贈られるもので、6月19日、ドイツ連邦共和国大統領官邸にて、ヨアヒム・ガウク大統領より授与されました。

岡本道雄先生ご逝去、お別れの会開催

岡本道雄所長・理事長は7月24日逝去、9月17日に京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホールにておこなわれました。(詳細は1から3ページ参照)

木村敏常務理事が代表を務めることになりました

編集後記

新しくニュースレターを作成することになりました。ご意見、ご希望などお聞かせください。事務局は不在のことも多く、ご不便をおかけしておりますが、よろしく願い致します。

なお、「岡本道雄先生お別れの会」で配布した冊子をお分けています。ご希望の方はご連絡ください。

(丹羽結花)